

JAG国際エネルギー株式会社 御中

「（仮称）那賀・勝浦風力発電事業に係る 計画段階環境配慮書」に関する意見書

記入日 令和2年6月4日

氏名 日本クマネットワーク（JBN） 代表 佐藤 喜和

住所 〒060-0818 北海道札幌市北区北18条西9丁目

北海道大学大学院獣医学研究院

環境獣医科学講座野生動物学教室内

日本クマネットワーク事務局 事務局長 下鶴 倫人

環境の保全の見地からの意見

（日本語により意見の理由を含めて記載してください。）

下記の理由より、「（仮称）那賀・勝浦風力発電事業（事業者：那賀・勝浦風力発電合同会社）」の撤回を求める。

記

【四国のツキノワグマ個体群の危機的状況】

四国のツキノワグマ個体群は、国内で分布の縮小が見られる唯一の地域集団である（環境省自然環境局生物多様性センター 2019）。現在は剣山周辺の限られた地域にのみ生息し、推定生息数もわずか16～24頭である（鶴野ら 2019）。2036年の絶滅確率は近交弱勢の影響があった場合62%と極めて危機的状況にある（太田 2014）。

四国のツキノワグマを絶滅させることとなれば、「自然共生社会」を含む「持続可能な社会」に向けた「環境立国・日本」を宣言し（環境省 2007）、国連サミットにて採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の取り組み推進を標榜する我が国において、国内的にも国際的にも批判を受ける事態となる。

【（仮称）那賀・勝浦風力発電事業の問題点】

（仮称）那賀・勝浦風力発電事業で想定している風力発電機設置エリア、搬出入路エリア共に、上記の様に危機的状況にある四国のツキノワグマの極めて限られた生息地に近接し（日本クマネットワーク 2020、添付図参照）、ツキノワグマが生存のために辛うじて依存している森林の広がりや質を大規模に減少させ、今後、四国のツキノワグマが個体数や生息域を広げる可能性を打ち砕く危険性をはらんでいる。さらに、発電施設設置のための工事による攪乱や、敷設される作業道などにより人のアプローチが容易になることは、いずれもツキノワグマの生息にマイナス要因となると予測できる。

これまでの研究から、ツキノワグマが生息地として主に利用しているのは食物の供給が十分確保される落葉広葉樹林であることが明らかになっており、本

州のツキノワグマは落葉広葉樹林を中心に広い範囲を面的に利用する。しかし、四国の剣山山系のツキノワグマは「稜線部」をなぞるように線上に移動しながら暮らしていることが明らかになっている。剣山山系の森林は、歴史的に人間活動の影響を強く受けており、標高1000～1300m までの大半は針葉樹人工林によって覆われ、ツキノワグマにとって好適な生息環境である落葉広葉樹林はそれ以上の標高の稜線に筋状に残されているに過ぎない。そのため、四国のツキノワグマの絶滅を避けるために、既存の生息地を結ぶ生息環境のネットワーク構築が喫緊の課題として挙げられている。今回はまさにその「稜線部」に十数kmにわたって大型の発電用風車の設置が計画され、ツキノワグマ残存個体群の生命線を直撃しており、現在の生息地環境を破壊するだけに留まらず、将来に向けた生息環境のネットワーク構築を大変困難なものとする。

「(仮称) 那賀・勝浦風力発電事業に係る計画段階環境配慮書」においても、哺乳類の重要な種としてツキノワグマが挙げられており、「主な生息環境が事業実施想定区域に存在することから、施設の存在、施設の稼働により、生息環境が影響する可能性がある」と予測している。一方で、動物の生息環境に対する専門家へのヒアリングや動物の生息環境に関する環境配慮の内容は、鳥類に関する事項に偏っており、ツキノワグマ等の哺乳類の生息環境に関する具体的な評価手法や配慮方法が詳しく述べられていないにも関わらず、総合的には「重大な環境影響は回避、低減できると評価する」とされており、適切な評価がなされているとは言い難い。ツキノワグマに限らず野生生物の地域的な絶滅は一度起これば取り返しがつかない。科学的予測の不確実性を考慮すれば、個体群存続にマイナスの影響を与える可能性がある人為的行為は、予防原則に則り、中止しなくてはならない。

再生可能エネルギーの開発は必要であるが、その建設地は慎重に選択する必要がある。わずかに残された広葉樹林は、生物多様性保全にとって最重要地域である。ツキノワグマ個体群の保全のためにもなくてはならない環境であり、そうした地域における開発行為は厳に避けるべきものである。このような理由から(仮称) 那賀・勝浦風力発電事業の中止を強く求める。

文献

- 環境省(2007) 21世紀環境立国戦略. 24pp.
環境省自然環境局生物多様性センター(2019) 平成30年度(2018年度) 中大型哺乳類分布調査調査報告書. 67+41pp.
日本クマネットワーク(2020) 四国のツキノワグマを守れ!—50年後に100頭プロジェクト—報告書. 126+28pp.
太田海香(2014) クマ類の生態・経済リスク管理のための個体群生態学的研究. 横浜国立大学大学院博士論文. 143pp.
鵜野-小野寺レイナ・山田孝樹・大井徹・玉手英利(2019) 四国で捕獲されたツキノワグマの血縁関係と繁殖履歴. 保全生態学研究24(1): 61-69.

以上

別添

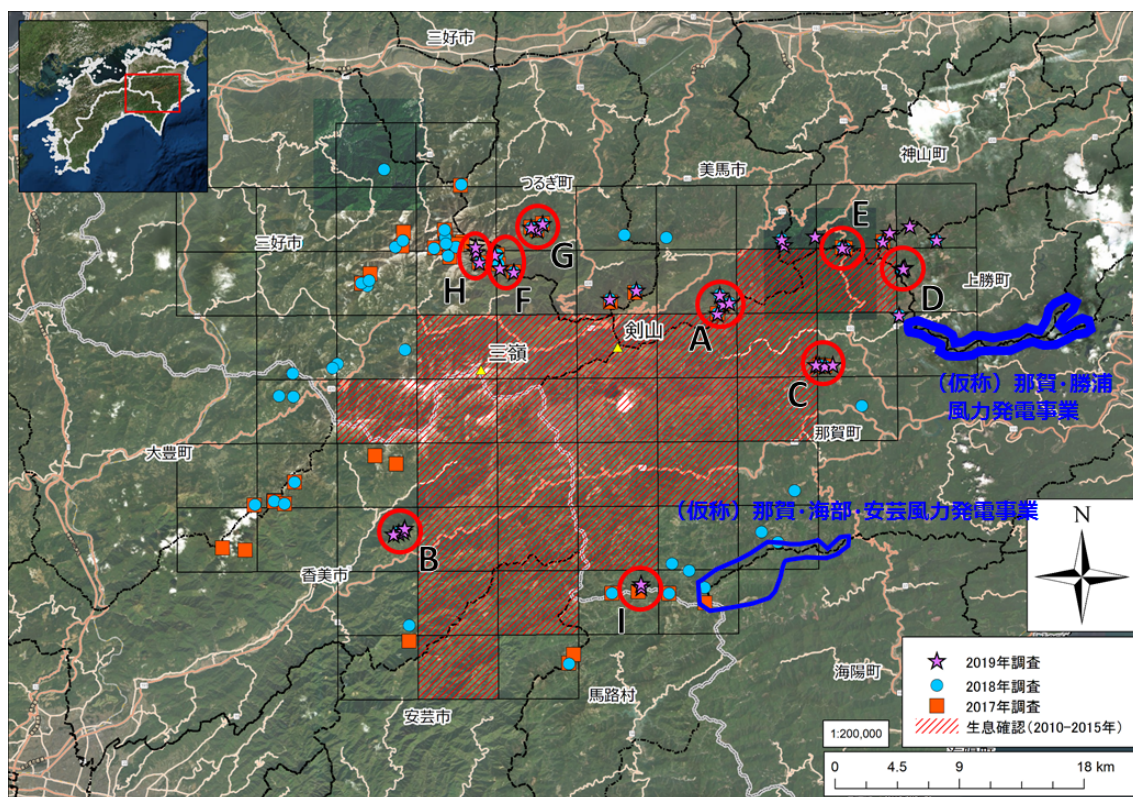


図 四国のツキノワグマの生息地と（仮称）那賀・勝浦風力発電事業

赤メッシュ：2010～2015年時点での生息地

赤丸：日本クマネットワークが2017～2019年に新たにツキノワグマの生息を確認した地点

日本クマネットワーク（2020）四国のツキノワグマを守れ！ー 50年後に100頭プロジェクトー報告書、126+28pp. を改変

*日本クマネットワークの活動

日本クマネットワーク（JBN）は、クマ類と人の共存をはかることを目的に設立されたNGOである。クマ類保護管理を専門とする研究者、各地のクマ問題の現場で活躍する専門家、自然保護活動家や国や地方の行政関係者、学生や主婦の方など、クマに興味のある様々な会員で構成され、クマ類に関する情報の共有、クマ類の保護管理や被害防止などに関する問題提起、地域の活動支援などを行っている。四国のクマの保全に向けて四国自然史科学研究センター、日本自然保護協会と協働して精力的に研究と普及啓発活動を行なっている。詳しい活動内容についてはホームページ<http://www.japanbear.org/> を参照いただきたい。